連載 第15回

ささやかだけど。たしかなこと。

田中康夫

You are the Hope for Tomorrow.

「アナログレコード」復権 「形式知」ならぬ「暗黙知」こそ 時代を読み取るカギ

レイアウト――宗利淳一デザイン

豈図らんや、「アナログレコード」が復権しています。アメリカにおけるレコード売上高は10年連続で右肩上がり。2015年は1192万枚。前年より273万枚も増加。その売上1位はアデル。2位テイラー・スウィフト。3位ピンク・フロイド。4位ザ・ビートルズ。5位マイルス・デイヴィス。3位以降の〝懐メロ〟と異なり、アデルは1988年、スウィフトは1989年生まれの20代女性です。

インターネットを通じてダウンロードする「音楽配信」と、コンパクトディスク＝CDに代表される「パッケージメディア」。その両者が半々の比率を占める「音楽コンテンツ」全体の売上は長期低落。一人、気を吐いているのが、ヴァイナル＝Vinyl なる符牒のポリ塩化ビニル製アナログレコード。

右肩上がりの傾向は、アメリカのみならずドイツ、イギリスをはじめとする音楽売上高の上位10カ国に共通。第4位の日本も、2014年に40・1万枚だった生産枚数が昨年は66・2万枚と1・65倍の急上昇。出版社ステレオサウンドも『アナログ音盤』を別冊で編集発行しています。

今年1月、全米家電協会＝ザ・コンシューマー・エレクトロニクス・アソシエーションがラスヴェガスで開催した見本市CES2016でも、パナソニックとソニーがレコードプレイヤーを前面に打ち出し、話題を集めました。

Technics 銘柄で旧松下電器産業から1972年に登場したSL―1200シリーズ。2台並んだターンテーブルのピッチコントローラでリズムを調整しながら曲と曲を巧みに繋ぐ、夜の蝶とは異なる時空のクラブやディスコのDJにとっては「伝説の名機」です。

「国分寺と立川の頭文字を取って関東大震災後に開発された街・国立に位置する大学のキャンパスにはあまり足を運ばず、家庭教師やDJのアルバイトで忙しかった」と、2月17日付『毎日新聞』夕刊の連載企画「私だけの東京・20

20に語り継ぐ」で〝告解〟した僕も、大学生協でローンを組んで1台7万5千円のSL―1200MK2を購入。レコード針メーカーの雄、ナガオカの専用ダイヤモンド針をカートリッジに装着し、ベストカセットをガールフレンズに〝謹呈〟した記憶が蘇ります。

実は1980年の処女作『なんとなく、クリスタル』の計442に及ぶ注の一番目は「ターンテーブル」。再録すると「プレイヤーのうち、レコードを載せる部分。甲斐バンドやチューリップのドーナツ盤ばかり載せていると、プレイヤーが泣きます」。

その呪縛ではないでしょうが、1986年にCDの市場占有率が52%に達し、アナログレコードやカセットテープを凌駕。民生用CDプレイヤーCDP―101を16万8千円でソニーが1982年に発売してから僅か4年後の分水嶺でした。更に2年後にはCDとアナログの比率が9対1に。全世界で350万台販売されたSL―1200シリーズもパナソニックの経営再建と軌を一にする形で2010年に生産中止となります。

その「伝説の名機」が今夏、SL―1200GAEとして復活するのです。先端にカートリッジを装着する、トーンアームと呼ばれる腕状部分がマグネシウム製の本格派として。一足先にソニーは今年4月、500ユーロ≒6万3500円でPS―HX500をヨーロッパで販売します。

持ち運び可能で廉価なアメリカ製レコードプレイヤーも人気です。Vinyl Motion銘柄でION AUDIO社が発売のポータブル・レコードプレイヤー。LPレコードサイズのシンプルな黒鞄仕様のアタッシェケースにステレオ・スピーカーも内蔵。搭載のリチウムイオンバッテリーにUSBケーブルでパソコンやスマホから充電すると4時間、屋内でも屋外でも演奏を楽しめます。日本での価額は8千円弱。僕も購入し、重宝しています。

価額7ドルの低コストラジオ「Harko」を1920年に発売した歴史を有するCrosley Radio社からも同様の形状で、ベネトンの鮮やかな色使いのTシャツを連想させるラインナップが1万5千円前後で発売されています。

アナログレコードに魅力を感じているのは、ヴェトナム戦争前後に〝多感な青春〟を過ごした「フラワーチルドレン」世代とは限りません。中古や新譜のアナログレコード専門店「HMV record shop 渋谷」を取材した昨年11月2日付『毎日新聞』の記事「柔らかな音の魅力 アナログレコード人気が再燃」でも、「40～50代が客層の中心になると予想していた」が、「実際の来店者は30～40代が中心で、予想以上に若い世代が多かった」と報じています。

成熟した大人の音楽を意味するAOR＝アダルト・オリエンテッド・ロックと呼ばれる1970年代半ばから80年代、そして90年代初頭までの楽曲を、僕の5千枚余りの所蔵アルバムから選曲し、毎週火曜深夜24時からFm yokohamaでお届けしている番組「たまらなく、AOR」への〝CD世代〟からの反応も、想像以上なのです。

20kHz以上の音を人間の耳は聞き取れぬとの「根拠」の下、22kHz以上の高周波をカットしたCDは、硬質な再生音が〝身上〟。『古くて新しい』アナログ盤再評価」と題して昨年10月3日付『朝日新聞』は、「取り除かれた高周波こそが、自然な響きや微妙な音色を醸し出し、人に心地良さを感じさせていることが、後の研究で明らかとなる」と紹介しています。

「文化や伝統、家族や地域といった数字に換算出来ないもの＝価値ゼロ」と見做す経済的新自由主義が地球規模で破綻を来している昨今、人間が抱くべき「温性」という体温の存在を「アナログレコード」の中に、人々は「暗黙知」で察知し始めているのかも知れません。木を見て森を見ずどころか、葉を見て枝すら見えぬ「形式知」という「デジタル」思考では海図なき時代の趨勢を読み取れず、周回遅れな「アナログ」と化してしまうご時勢。「アナログレコード」復権は、その公理を暗喩しています。

たなか・やすお……1956年生まれ。作家。2000年から06年まで長野県知事を務める。
近著に『33年後のなんとなく、クリスタル』など
田中康夫ダイレクトメール→tanaka@nippon-dream.com　URL→http://www.nippon-dream.com/